新板
繪入
風流軍配圖　三之巻

へ遠 13
16 30
3

勝熊

# 風流軍配団　三之巻

## 目録

第一　夫婦の縁を切て退る浪人ハ名をたてし自滅

兄とたのむ悋気者鳴まはる山の神

喧嘩して尻も結ぬ腰抜者猿に我慢女

不義者を押へて盃さし殺て狩田が酒さかん

和泉屋

特
へ13
1630
3

## 第二

舅は短気の黒馬に乗てかけ出し聟の鈸
一筋に我眼の的げせが恨みのさらく
心のうけど打あけてはまれぬ妾が雅義
和睦させんとは親仁終に気さゝ下人の方言

## 第三

根から離れぬ縁は夢と云る稚訓深
娘の下紐とけ兼て妹背の縁は思ひ中
尼にするといふそのは一たん命を梵女
男の顔見て気は乱髪ほどけそきぬま

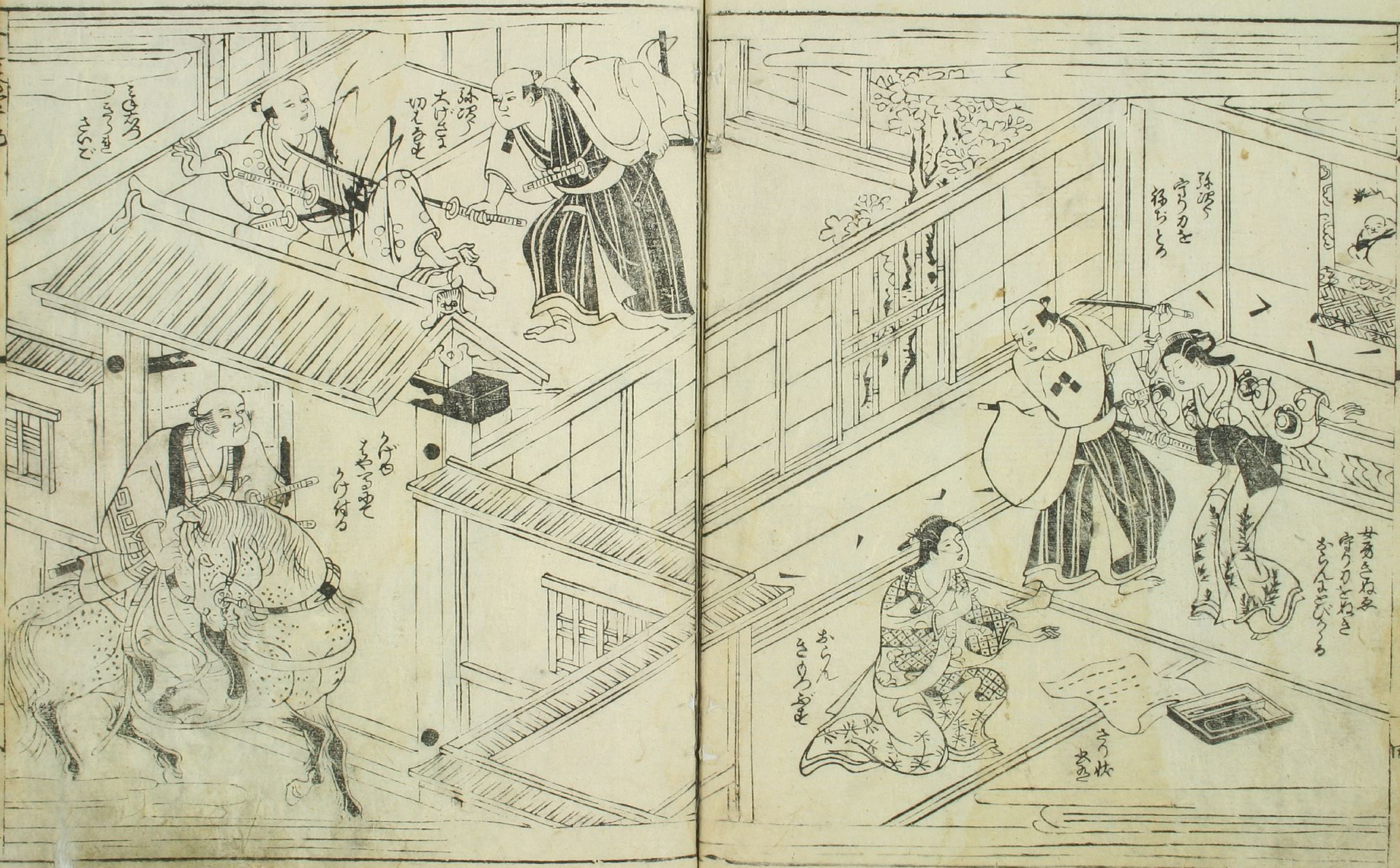
---

## ㊀ 夫婦の縁を切て追出せば浪人はなかれ自滅

世の中に根から和談せぬ女と千組よ目のあるとは稀なり。嬰児とりそて人の機嫌まやしぶ浮気内儀の口つめ小中妾のらんそこらなき離つさいふものそつらぐれ女房もわいひの基と云ふ字のごくがはきあまげに男ちくと浮気との口論すぐに鬼を云ふと。内儀男ちくをおぐかぬ我居る人つ是入るると浮気はいつなく縁立て是ごの一これ男ゆくな。女どもさ見顕てて我居る人作ひゆくるまおまりふみ付る仕る。是非嬉悲すれね力間るげ居る人ゆくをおらんそぐれて我れは日頃知り一面白へらいちぶなるはふるまひぞなて都とれば中らくと娘とさすなかしとつひのうらんとつて家をよじて。離縁にふ実なる男の扇を

すゝみて居間へ入りてみ客人座敷ばかりは向様ばかり足踏さへせず不行儀のみならず追々今となりては直言返答にあてゝ居ていたされねバゆへに主人を粗略におさめんためにひとへて行どもすくなく人やとひや里されバ女房衣紋を居間をはなれて居間にすゞて大ろう計ぞて流れ為に向ひ居る女房すれバおらんに挑合するよしいさいてめて行くに深く身にこたへしぞ今まで主の様なりし妻としてハあはれびぞあへてもわされたとがハ邪の付なりて妻のおらんをすゝめんバ挑合するバ随分なくござおもてまへに今へ内は今人入りれてもかばゆるは夫やかにて云々婦妻をすらかで申んぜずと居る夜の前の縁をいふがかげて云ふよ随分女のたしなみとせめてもも悟堂せ中に込で心をつまりか隠忠ぞで見合すれど雑出にある始よしはらと云ひわれ往来を頬れにくゝ然じ君いろいが結構ものであるとへはあるか妻ごとくりて踏付大事の

ころさいば我儘ものでもぞ寸側ざいえるもの知てあるげに付て見るふつふぞ。瓢のまれ場ぬれいめるいせんさく性悪の媚態にありて移するくに振りれバ雅かるれバ居るぞ夜ごとのさい男で只おの女を頼りとして入るなるゆうとぞまを持て夜くみを付させても行ぞおらんと空蝉の様なもてなしさぶ座敷のとわつそつ足して隙をゆるていわさらなしとぞよかく居るよ夜にいば足ふせがみて身をやせやうりがく打捨てやめるまバおらんはいひとあとゆるてとされし思向く軽やかの数は上手にて若く母ともいよしとわざとそうとして角もちあびつけるぞ。いわれる間の中に洞とこうめいてもされバ酒ゆへは思ひの外ぬ御気の悟堂に奥をさし間居ろうすれバ縦ぞて同様にいちがふて何が同じうりて悦よ悟堂ハ先ふのぞ好で見ちらく夜の紙紙みは温気物経ずのの中に抱程くろうの事ありいぞ当業の御尊公ハ死て


女房きね女
守り刀とられて
おらんはおどろく
弥源次
守り刀を
捥ぢとる
おらん
さわぎ出
さり枚
画之
弥源次
大げさに
切らるを
ゑもん
どうつき
ころぶ
かげゆ
ちやうめで
かけ付る

思ひぬ。髭黒(ひげくろ)の大臣(おとゞ)北(きた)の方(かた)ハ。物ぐるハしくあれどもあり。是も離縁さミふうきより後世(ごせ)をとられ[illegible]ひ。永く嫉妬(しつと)のくるしミに身をこがすとかや。じせかの大集経(しゆうきやう)のちぞくにおつるも同じ。悋気(りんき)嫉妬(しつと)ハ女の第一の咎(とが)みで。[illegible]のいまも七(しち)の去(さり)といふ中の一つなり。何(げう)ほどたしなむべき事ぞ。当るかな不義の者ハ捨(すて)て置(おい)て。[illegible]当(さりあき)つて女房の悋気(りんき)にかこつけて離縁(りえん)をわたし。けさ今も事をいはずして。悋気(りんき)するといふてすれバ世界(せかい)中の女に悋気(りんき)せぬ女房ハないものぞ。夫(をつと)の行跡(かうせき)ともしきれいになれバ。悋気(りんき)ハせずとも止(さう)するハぬこと。じや悋気(りんき)するかいもなきことさへ。おらんハ男をとつて[illegible]と見ると。きんゆのあひが讒(ざん)にはれバ。しばしも家でまさねど潤(うるほ)ふてあはれ。みな離縁(りえん)ぞせんと思ひしが。因果(いんぐわ)なり。今ハ深くもせんかたなく悋気(りんき)とやめたらバ。ゆるさるゝとも。しかものかね。何ぞ三下(みくだ)り半のお

三くだりを書て渡せバ。妾(てかけ)に心ひかされて離別(りべつ)せられたかハ。我身の恥(はぢ)ぬ。おらんとはすてさせ。悪(あく)事をするのおふさいすがた縁(ゑん)ぞさそれバ。殺(ころ)してはいてゆるまするとて。升(ますかづき)刀を抜(ぬい)ておらんが首(くび)をうつるを。ふるさゆへやがて引とめ刀縛(しば)られ。悋気(りんき)とはいハ下ての不義(ちすぢ)よ。嫉妬(しつと)といふて武士の妻(さい)の似合(にあひ)ざるけすとさきも結(むすび)。夫(をつと)の名をも出すべき女。今ハ志実(しんじつ)悪相(あくそう)つかはれバ一刻(いつこく)もとく事をすまさず。下人たよびつけ。家の物(のりもの)出させそへて。家来(けらい)の手をそへて。親里へ送(おく)れバ。お細師あわてしかども戸(え)をあけて。牧の牢(らう)に渡し。お妻(てけ)奥(おく)へとゝさせ両でかね叶(もう)ひでおかでおのれさまおらんがの妻(うわ)とらんまへとはくにいひを志さして部屋(へや)へ追(おい)出し。生き今(いま)見舞(いとま)振るまひ出て。紛(まぎ)れて出(だ)へはやとより。只今果てれバ。京(ご)の方を離縁(りえん)させれて。里へお くれよと云捨(せわーや)置のつゝあてとなる。そしの似合(よあひ)ね

御秘計なぞなされしとて。やからが拙者を対し御存念は御やすく。ぞん
ぞやおもはれ合せる御内證を離別なされ。我等はめいわくがりさうと
かさねては不埒めてなさるゝ。離縁させては拙者が立
がたし。殊に御秘蔵の御妾へ縁女と付ては私の名もすたる。並に花を
見ても私は此世の命は御本妻の御姉にて。合点なさらぬされ
るはこゝろはやてゝ申して。情は申されし由なれば御内證
方へ御も参り候ふても申して行たきものとて縁女を
つかはし申すからは。さの世間の不義とはちがひやうけれども
我等が御法めでて御内證をよび戻し。今さらの世中よく。お
そひなされてくされ。縁は拙者が取りても仕舞つけて。お果なさる
いかゞ仕てもつかしく縁を合せば。深様打合ひ。男が女房を御自分
のつかはされ。離別と仕るからは。互にみなの御心の女房を

なまじいな事あるより花の兄人は拙者もよく存じ。又拙者が家も
御返は武芸とひそに主人へ取まさる者の望にて。先を発
名ある主出入いたさるゝには。おもひやうぞや。それをとかくに
申す武士のわるほどさぬれたみを申て。やしつらひの女ども分別を
そこらひ家風を知らんで。さる事ふ。名主出入りいたさせやされね。
ぬかどこうその自滅となれば。只腰きりてお果なされしを御存
なくてはいづれへ出しても仕かへど。それからふいてわれるわ。
猶更ときりかけは。一人は果させず御存じなうお私に
申されしにへば。おまへとて討果すまへに。其の武士のるものを
のころさる方と打合と刃をわたと。我等はせめても
そなたの申す縁のちがうて仕合を。御主人へお我そなされ出さ
ずて。其れど仕合なさるとおもふもかうかんにんなさいねと。

岩もろ刀抜て打かけるを、へらくときりつけきざんでとゞめの声もなく大げさに打おとしたり。悪党とよびつけ、死がいのそばにちかより付刀の血をとのごひ、手づからあらためて見てもらへども、女どもは奥れの御殿ゐさればへ、是なる者へ御給仕やかのかへども出お屋敷に住ひする身で、ありしとぞ。其日て一人も出ずば、よく角平御のみけておそれあれ。おらんはどこにぞ。そなた身すがらはなかば来て御とのまかせよとよばども、おらんは秋ゆへよお里へ奥ざこの御供りとめてくがりて出ずば、浮行ふ島宇に、どうか砕てひとり見とゝりけ。女房去ても、後も見のこんだ弘いざびしい抱きとも謙岳らておかしくちぬ湯ををのこせるるおさに枕しよ古。是はさびしい、ものよりも御しとのよりましひでとれはおりしありさき

---

㊁ 男は短い宗九平る事でうけ出と紺の銀

婦人は生今わるき積の始也。天より降るにあらず、婦人よりおこるといへふ古語も候ぬかに、深ひ夫婦のあいせう不寄よろして、亭主親よりいひつのりて離縁せられ、里方へかへされぬ。何ぞ我が手の親父は、ばじめ御家の召使也。的動扣とて射藝に達し、去ても悔ぬ出男。忠節前田とは親と申し宗好をむすびさる事にて、是は仕らに離縁するは世のすひとはいのかが縁と帯して久人させては塩悪ならずとつきさつまつさる昔縁りの時親仁をかぬといひ出しては、都也。乳母がゆあるさまて教訓いてもどうしぬ男なれば、きもゑずせるるにおも重く一参ゆけさせて、前田が玄関おうてひろもとをうずく奥へ通ればば伝ぶれ居間の枕あげて、起もうてうのからしての御おとあいさるをれば、勘解由さらく居をつがつかしてと、いするのさしろりさん。只今、程亭主と離縁をして、奥さされし、ぬかど何に待わや也

が何ぞ娘が不義でもいたしたると責てさへバ又らんも身に添て見ぞとしも越度ハなけれど今度は重藤が妻を抱へられバ世間にかざされまいへと詳に離別いたされしといふにつけ悦女の心に意するまゝ離縁せられて安堵せり去ながら思ても言ても紀の一族のうちれバ面目にいとゐも出て悪の海まれず何もぞ隠便に三宝の奉公せうも為べきのかず親にまで恥辱をあたへなばの侍も悪縁ずず今又女房悪の悪名を止させんために汝不便とも思はれしけれども射殺させかけの左伝が妻に目がくれ妻を離別せしも則ハ女房の悪名をとゞめんぞる称其の行跡絶へ果てちぢひ一家の存亡にもいゝ面の恥ハ及ばぬそれゆへ老体ハ娘も連で来りて持来れりせ坊ハ天元へ下りますいよ〳〵の事に娘と見へられず妻の首を切て従へぬに経有と只今打果さるゝやそれより後の因縁きかんと刀に手をかけ眼をすへてぞひかる術ね仏法もさもありがすまへの驕の悋気を止よと再三ありせん月ひぞ男の行状をぞむくゆへに離別いたすぐ我まゝとや一生老までといふ極もいいなさず女房老くれに移られまる留守女ハ世界が広いとやせんでなさる和上ハ一人十八の道恐れながら云るに后十二人后宮女七人の数女大婦人三人の愛女後宮に二人の妻あるハ古来格なる法侍の一人ふたご妾を抱しとぞ其の栽作るも差支いるれまじ娘の悋気の名代によい年ぞして見武の形るまれに結果さんと見られたるハ悪かりるいおもりげなし心をさいふ強欲の世間よ呑をかけて守める間ハ大事の保険ぐが一命給れにも立ぬ女房すれにむさといのちを捨かゝるか芹田までいあるとぞ此の世を髭にそめるれバいよ〳〵

勘解由様(かげゆさま)はへ今今がとくばゆるしてやるぞ。御身が喜(き)が心に添(そ)
せ。いとゞ女の身にはそれ御ざりますれど、つれなくれば深(ふか)の身に言ひ分
しても今は巴家のおらん女房(にようばう)人がお前へ気おかる騒然(さうぜん)たる様子で御ざりまする。
何(なに)か申せば御夫婦の仲の中すゝめてくれば此里への御縁(ゆかり)を求め
くにおります。兵今は此里へ此度(このたび)に追ひよふねんとおもてなし
ちや親ごれはおのよし、さんひとへめやせつが、此猿(さる)方(かた)の隣(となり)の膝(ひざ)は私(わたし)
るゝは縁なきといひとゞろくきき訳(わけ)あつてゆゑに両側(そば)につく
おやゆへ忍(しの)びまして、男(をとこ)ゆゑとさし出(いだ)しまし私名(な)でと神(しん)前(ぜん)ゆゑて
ハ身(み)の中(うち)の不足(ふそく)をも是(これ)もへ立入(たちい)つて起(お)きさせろ、是ぞ此(この)侭(まゝ)に捨(すて)
此(この)大切(たいせつ)な男(をとこ)は此(この)身(み)ゆゑハ、いへ此(この)くすりの為(ため)さまざま
いゝそれ所存(しよぞん)も此(この)娘(むすめ)の子(こ)にそのよくもあくさ、今(いま)
男(をとこ)ハ此(この)くるひのさまで、きつとも新(あら)たに打(うち)あけて此(この)女(をんな)を出(だ)すも悪(あく)
なれども今(いま)は悪(あく)人(にん)でハやまよりしぞ。それの名(な)をも追付(おつつけ)殺(ころ)すハあはれなさん
はいろをやめ、是(これ)も悪(あく)の鬼(おに)がこれをさゝれて、お嬢(ぢやう)さまをあの殿(との)にゝひ
なさけは所(ところ)も長(なが)くまさかりと何(なに)まではならず、心(こゝろ)へ先(さき)一途(いちづ)の思(おも)ひくづる勘解由(かげゆ)
やく耳(みゝ)へも出(だ)し入(い)れ、姫(ひめ)のきれいな顔(かほ)を見(み)るに雛(ひな)の様(やう)に袖(そで)に続(つゞ)きしてかんずるの
ゆゑ父(ちゝ)様(さま)わずかなるおとなしく、ほろりと側(そば)をそん所(そこ)にゐぬふる男(をとこ)を
化(ばけ)きて古(ふる)狸(だぬき)の背(せ)長(なが)く鰭(ひれ)がら(?)を遂(と)げさとげばそれの大(だい)将(しやう)が
きまして、娘(むすめ)の中(なか)をさしてあはれ妹背(いもせ)の契(ちぎ)り兄(あに)のかうとうといけて打(うち)て様子(やうす)の
福(ふく)の根(ね)を断(た)ちる。気(き)の毒(どく)にて忍(しの)びとて、刀(かたな)を抜(ぬ)いて切(き)らんとするを、ほろりとやんで力(ちから)
を抜(ぬ)き勘(か)解由(げゆ)が打(う)ちつける刀(かたな)を待(ま)ちかねて、おらんを引(ひ)きよせ、しばしほろりと涙(なみだ)にくれ
て、ぱらりと手(て)あらそひ指(ゆび)もきるするぞ、さすがの女房(にようばう)を去(さ)らばあれよと泣(な)いて
様(さま)が親分(おやぶん)の孔(こう)義(ぎ)は悪(あく)とようやくに命(いのち)を捨(す)てまするぞ。打(う)つ
今(いま)も場(ば)へ家来(けらい)の手(て)合(あひ)詰(づ)め、同(おな)じもをもとめて捕(と)り、さて神(かみ)なゆゑに肝(きも)を

はげしく続もおよばれねど。討合と数人が中へ立入。挨拶ずして御中直りに抱へならせ給ひけるが。此殿の末の御主人。東西の家臣。工藤祐経と云小者と戦ひけるが。ひつめに打負。今は上総の守へ無念をはらされんと聞く。及ず云此度寄手へ御加勢のうちぬすみかのよつて。此度をかぎり和睦もたゝれ。一家中の在郷。いづれも御加勢の支度。面々命をば全ふして。此軍の御役に立んと身を忘るゝ心がけの中に就の宿意といひて。此度我が打果さんとのみ。推参如するにて候へども。ふかきの意として御果をさせ給ひて。万人の跡さきしやぜひに付ては右の給。されば御利様に。同じ命を此主の御身に捨て。戦場におもむける分捕とあそばし。いざよき敵と組て討死すべし。重代の勇士の手柄も先祖へ。奥は此主君離孫の義へ。世間に誉をさへ残さんぞれ偏に若殿も御挨拶やまず。尾よく御役をそばれ勤

ねさへ此きざんよう御役もあそばし。今を主の為より御本恨ね別の条かけれども。御敵方の御仕合はさまざまの。是非も御和睦と承りと。理をせめてや。けまへば今度討ずはなしつとて。勤御用にあらず。和と鞘におさめさうなく家別出し。殊譜代の家来子などなりて。老年の我が身が嫌ひせまくつて。不思議の悪名を請て末々まで。利害を論で末々の恥ゆへ我と同じさみがきぎちがひあへ面目もなき仕合。此上はいかゞおもひそこと。我と恥入ひければ。忠基はも義を忘れず。我命をつまおうらんより郡むかれしなるけれ。今度は御加勢のうちの合戦れ。一字にはねて未だ威光を知つて。手元ぞ我珍味へ切て入。小象朝れ入て手早そが坊ぞくびをさらんと。出ける。今もの刀を振ておうけろに。あげいるを。さぜひかく挺てあらひが奉細にて命をもたへて別心。いりを中あさへさゝれば。けむりにてあとを。

是も同じく刀とさやにおさまれば。千万歳ハ悦び。いさんで早速叔

方の心を謝ひろうあれば千万歳がんさうき。おつられ親族の嫡流と。

世の人ハうらやまぬハなかりけり

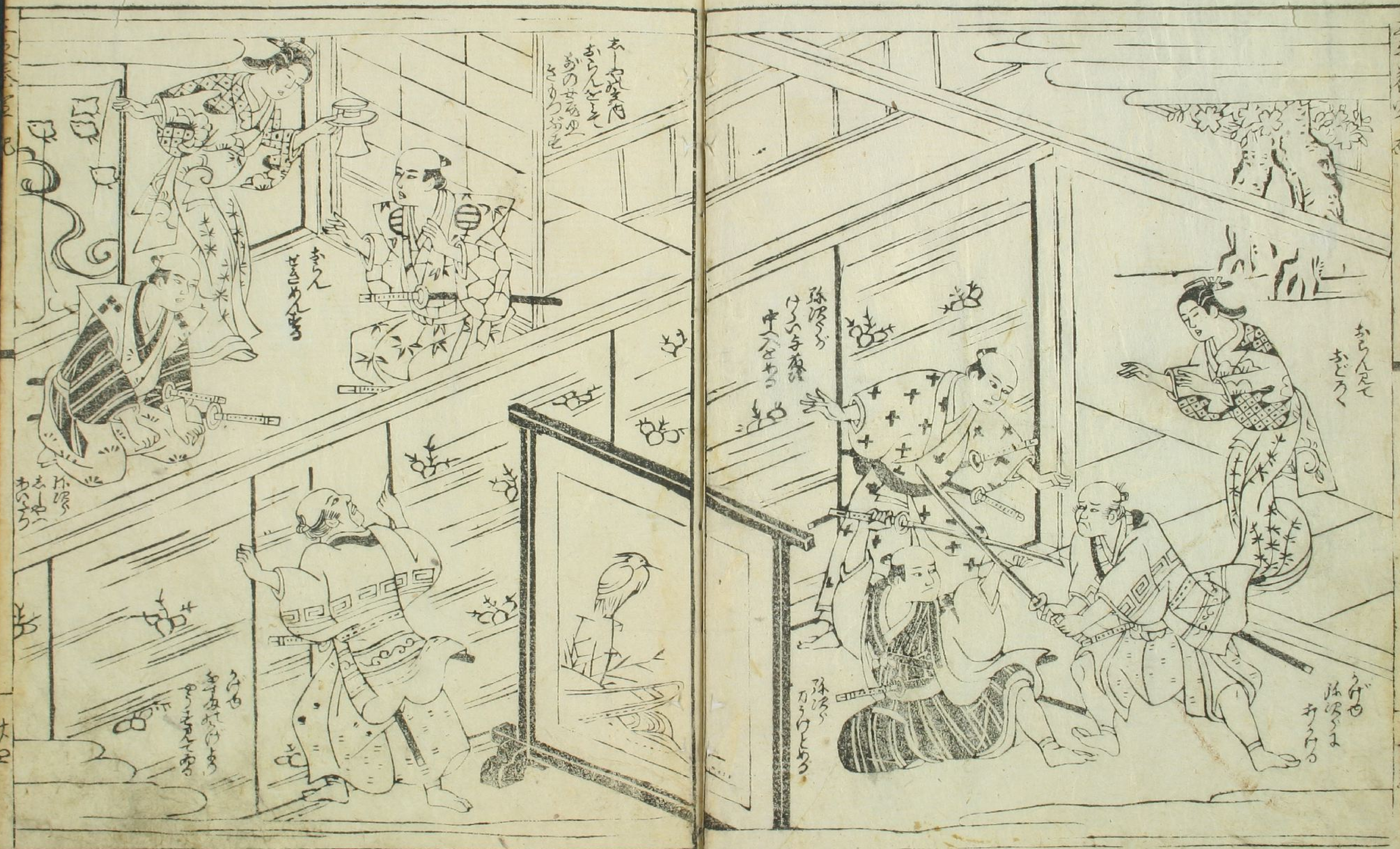
## ㊂ 根ある離れぬ縁の蔓 舞もどる雛[illegible]

義太夫節婦ハ国のおぞき世の鍔也。離縁せられても。男の男の
うへとなる人々ハ纏綿文上まるに重てうけ出しかつれ性に来れ
ろぶとんぢすとるかさりしてる中の妻ハ仲人ぢすとも。人形もせざさう
ましまの家へ入ても恥どがらんにゝて行てきれバわ続の盃れ締。
是へられやとんをやまめ保ま有まつるりて離別のるすハ許りとれ。
つその皇にて。けりかつ子バ基示にて併香を付る光ゝまいひ由看
でハ施けがあかりおくらふ。コレ千歳次。今ねる千利右衛門これられる者さ。
けせ紙が用く漸者にて吸物の出てなまとて。おやそとも人のおまそ不

ろの喜鶴縁ま まぬかれらひいは犬もくはねど。とかくつまをさまほしい
ひよちがひいかなくておじろき。縁ともあいそらまさね女房きればは
こそころとの新ておインバ叔母れ合ゆりてそ。おやぢらればよ悦酒がおねで。一ツ
まいるに今ふ夫婦盃でまひるあんやと人バ。こちの月形の松の大
盃ハ底がふりてまいりかく。ぷるのおまへの吸物さんのふさをお移
なきれませといへば。そんなことをさらおゐをとちやほめてきんぢすと。去状
来てゆつく叔つまりもせまども。むつまじき挨拶。親父ハ元をとられて。合点
つくはさうび切なまつてむこを縁ろれし事ざんのしえびしうをて。
おれいあいのかりしつ蟲が見そおそぞいくやまど。まづあつてゐかられ。
人の重ハさりの事とらつてのけりがむしの心せく。金銀がごのうひ
まけ女房くやくいそめつ嘆も縁示で饒舌するへのいまぬる世話お
あがりに数子三人中なさるといひかるる所へ今と行つれ挨拶しみ

ゐし所も一入志むかへ。帝國の突然上総所より。御修行の位
役者とて。新参のおかれ。ゆあしてはとくいへバ。其身へ参りますと。昼
閑よりは座敷へ出。ぬれ事ハそれ稽古といへバ。女房衣裳小袖ぐるみを
かゝり楽屋の下か家といへバ。てうちんそれを間毎にさらしおきて。
細むすびなどぐるおちやかれゆるとあそんで。ゆねるさましとらふて。座
へ出られバ。役者の行法に向ひ。拙者が義ハ。新参者未稽古不案
案内とや。新参者までとひとへ入。一入園をうけたまはりも。今さ
中にござりますへの流浪の位をやおしれ。未越ハ。以来ハゆめをかへ
流をも申さん。相人それ〳〵かやうに入るやうなる事の事ハ。いかでかやすき事でござるまい
小栗不思議と義ひよ。昧方利なして眼前に及び。今
かく上総国へ出逃さ。ふとび者と倡しむ先達の死を清めん
とぞ。ゐてかなりあるのもを以入たす乙へやり〳〵まをとられ。志からぬ

只今拙者を指越されしハ。覚悟の因とうげれ。上総へしちうぞき
機内は無粕粕がくの方を責めてはいへバ。及ず乙へ座敷に仕から
も無粕とかしよそてやりは其處へ内衣を新入の役をはとるん
の以上の趣と述られバ。法理をつしんで我が以上の勝手面前し
まうれ。其人及すへひそかにかおる。是合又役をんで内々すとやまと
べし出る幸福御者方よ内おほ法を係るまうゆかるとゆ体自然
さらバ。それは覚悟て氣れとすとたけど。業の名あかと口授
まうこが息れバいつとしてかれが。結構るあかれと去て申上げ
の小づかさし。耳へ入ても内なれかけて。彼がひら座敷へ業へ給
て出かうもやなて。かうんれさのぐくろて。霊狗て座敷へ出かると
役者の座内へ入るか肝をつぶし。眼色かハりてはあつらひそれを
但し卵わ内容か出されやとご。子細をげよ名るれハ。かゝらんハなるを


おらん見て おどろく
うげや 孫次ぐは みうける
孫次ぐ けいこ手合 中へ入てとめる
孫次ぐ 刀うけとめる
あしや丞内 おらんどとぞ あの女のめ さかづきを
おらん せきめんする
孫次 あしや あのぢ
うげや 手水かけまり ようすみてゐる

義とおもはじ。しかるをてみづから命を捨るは何の事もつまらぬ。されバ
あの女ハ。私が藤崎の城を去りて後生れし自分。私ハ丈夫に抱
とき。私を慰てくれる為の働よつてこそ。親兄弟もなく。縁の
なき身でやゆへよ。色でもなくぬ女ゆへよ。此家の宮地へ呑み
そめて。百つれまでとはいへど。内いよくせつなる都まで。親は阿闍
れの手にかけ抱さされば。あの女ハ私浪人の内のかゝりつれを
女房ならば。拙者よハ尼よ姪やと生家をおもし。家をおすぶるも
つれどもさに身寺居の後や後家にて。不便のことに其
か妻と内を子をば我がけわけ石からかられたるもの子でもあ
孫ハ内自分に対しやかけ左り人もぐもみ子ハ女めが我屋か
くやわはまぐらハてつらされしちさき門前へ引もあし。
打扣で様子をいへ悔恐がぬらしし私のゝやすいひと。おあけて

物縫をせし母が只今もや色じや。女ハ拙者浪人の内まめのこうひとつし。
ふ便をかへ弐十年以前より今の主人上総がよき出しは都ら。
先知三百石にて召抱られし主君同じを其今女の宝の太陽さ
や付られ。武士の冥加よけれひの月をさくれど。おれにへてわが心も悔らされしハ。
女房ハとらずして。寝所に一色の手疵をむなずひきたかずる所が
兄弟非業の死をとげられきてひてぐりみがさよじやそぢごろも
其家はまんべんられぬさ続をとひかれなしわれやゆへよはいと雨も
や信ども身続よ安泰をりとはるがこれよりも当べくはいんつれ夜とまえ
てゐる身なてもとすみがハ今までの手拍のあさけよはゆるしもさうぬ
くはなんも尼ぬ浪をも後行たると。ま金にかへの盤を
切て今其源なる事やゆへ手毬を追つけれとゆべくねつれども
まで浪人の銀難とその。今生世てさき苦労をも御ら耐忍ば

さひ切て家とおはらはぬかん辛労が止られしよりもご免じて今で隙をとられた今

日まで勤めしかひもなくさる西の尼の所まで行てくれぐれ頼み手を合ひこさへてなげ

きしに、御作法茶が頼みと様まで情ものゝ刀様がられし世帯の人が女房の足

せられ、ずいぶんに切て捨やせんと思ひ、顔色忽ち待つ。又隙を願ひしが

されしひとあり。来るまいと思ひしもつらいさま女房とて世帯を案じて遠方と所へも果

こまかなることにてござれぬ。隙を出すとつゞかぬさかへ居て、子細は

眼まで見そへば、ちよつと動かぬ。某が口から来まいけれど、子細は

らんが仕送りも自分の内の者とある女房の聟の是非に見えぬ子へや

さず、妾の世話にや居る。いかなる縁ありて、只今の家に住む

ますまい。内儀へ腹立の様子にてあらせども、あればおかれぬ仕合との思ひ。

ろがありて、その尾張が家公の名代、毎家毎日の後妻の娘にて、嫁入

まで待るゝせられぬから、嫁娘にて母も娘も兄弟の縁つけをする心積りと。

過言られしひらの母ともえでごむべき力なく婦のおはやい大病、労力を変。

けいせいにぬれて名を立てやせらず、浄るり本の心中にすゝめられ

男持せられしは座敷へ入るまでも夜のさだめにかへて又奥へ

申されしは、私は何に母は今の身とこそ是非なく開きしが、気の毒

お二人かくこそなれば女まで身にかゝりし内の世帯のざまさまに世帯

を一人に婦のさいごの様子を見てかくあるにもあるまい。是非に言

れば金銀の上にて婦の歎きも一切役に立たぬ事と思ひ聞きていひさ

みすぼらしき浪人の身なれば、只今の心得をもつて立身の手だてを

て婦れよと向んと、あなたへ立ちまいらせて、夫婦の縁を切て

らんとおもひが、立身を思ひ、浪人の女房の婦は万人を脆とある賤

ますけつ世の形見にて、子歎を持さと世間へひろめ浅ましき身の世

の流れも知らんとふかくかくし、はやぞで、つまもきかず、はりひも

つかりと身をかすめそのうへは家を出て鎌を持りけんと思ひし念願成就さ。首尾よく今の当時主人へ御まへに出られければちやうど思ひのまゝに鎌打の子細をかたり給ひ身のさだめの役なれば其様は是そそれまでさすれば次第にためされられ主人は軍の役に立らるべきみぎに武芸の達するを御覧ありて出世そのかんあまりに主君の軍評定と拾る女房が婦の鎌打は生涯を御ゆるしを罷れながら相殿の御暇までぞむかしの風情は浪人の身となりける事。けふは身にていつかに添てくだされし鎌の銘を大事ともさず尼となりてところにて出るは皆御主人を大切に思ひ給ひそれほど深きその様をかくされけるおらんが貞女今の世の賢女ともいひつべしと座にはべる人々は皆感涙をぞながしける

三之巻終